実践報告

短期大学生のサークル活動と行動チェックリスト活用による新型コロナウイルス感染拡大予防策

－学生へのアンケート結果の検討－

Junior College Students' circle activities and pandemic prevention measures towards COVID-19 using behavior checklists

－ Examination of questionnaire results －

二口尚美[1]・三浦雅史[2]・小関友記[2]・守　渉[3]
FUTAKUCHI Hisami, MIURA Masashi, KOSEKI Tomonori, MORI Wataru

高鳥美奈子[4]・三浦悦子[5]・佐藤美輪[6]・小松義隆[7]
TAKATORI Minako, MIURA Etsuko, SATO Miwa, KOMATSU Yoshitaka

中村　徹[8]・佐藤理恵[1]・黒木雅美[1]・小倉真紀[1]
NAKAMURA Toru, SATO Rie, KUROKI Masami, OGURA Maki

神垣太郎[9]
KAMIGAKI Taro

キーワード：短期大学生，課外活動，新型コロナウイルス感染，個人の衛生行動

Key Words：junior college students，circle activity，covid-19 pandemic，personal hygiene behavior

受理日：2022年1月31日

［1］仙台青葉学院短期大学 看護学科　仙台市若林区五橋３－５－75
［2］仙台青葉学院短期大学 リハビリテーション学科　仙台市太白区長町4-3-55
［3］宮城学院女子大学 教育学部 教育学科　仙台市青葉区桜ヶ丘９－１－１
［4］仙台青葉学院短期大学 栄養学科　仙台市青葉区中央４－５－３
［5］仙台青葉学院短期大学 歯科衛生学科　仙台市青葉区中央４－５－３
［6］仙台青葉学院短期大学 観光ビジネス学科　仙台市青葉区中央４－５－３
［7］仙台青葉学院短期大学 現代英語学科　仙台市青葉区中央４－５－３
［8］仙台青葉学院短期大学 ビジネスキャリア学科　仙台市若林区五橋３－５－75
［9］国立感染症研究所 疫学センター　東京都千代田区富士見２－７－２　飯田橋プラーノステージビルディングJ1601

要　旨

2020年度、Ａ短期大学では、学生委員会の審議を経て学生に適切な感染対策を課することにより活動を許可した。具体的にはスポーツ活動とそれ以外の主に屋内を想定した活動の２種類に分けた、学生に求める17項目に渡る感染予防対策行動チェックリストを作成し、課外活動を実施する学生に新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）の感染拡大予防策を求めた。2020年度末までの登録団体数は18、登録学生数は251名であり、活動を実施したと報告のあった団体数は８、参加学生の延べ人数は355名であった。249名にGoogle フォームでアンケート調査を実施し、23名から回答を得た。学生は適切な感染予防対策の実施方法を理解しており、一部煩雑さや困難さを感じ、感染についてのリスクに不安を感じながらも、教員の指導を得て交流できたことによりチェックリスト活用に肯定的であった。学生間での感染対策実施に対する温度差や、アルバイト先での感染対策に対する不安も述べていた。パンデミックの状況を確認しながら指導により感染予防策を実施していく必要がある。

Ⅰ．はじめに

日本国内では新型コロナウイルス第一波が2020年２月から始まった。Ａ短期大学の学生委員会では、６月の定例会議において、学生の課外活動の実施の可否について審議となった。その会議の場において、学生から活動実施の希望が出されているとの報告もあった。

外食や不要不急の外出を避けることが求められていた。「新しい生活様式」として三密を回避しながら過ごすことが提唱され［３］、短期大学の授業は遠隔で実施されていた。スポーツ庁では、体育施設の施設設備における消毒などの感染予防から、用具の管理、更衣室での換気まで細かなガイドラインが作成されていた[1)]。文部科学省からは学生生活に対する配慮[2]も求められていた。これらを受け、学生の課外活動を所轄する学生委員会では、感染予防策をはかりながら、サークル活動を行うことが審議され委員会での承認を経て短期大学運営協議会へ上申、承認された。

学生委員会では未体験のコロナ禍にあって、感染予防策が実施される限られた範囲に限定し、適切な感染予防対策の実施方法を学生に提示することにより、学生生活へ配慮する方法を模索した。その結果について、学生に実施したアンケート調査結果から考察する。

【登録サークル団体と登録学生の数】

18団体でスポーツ関連が６、文化芸術関連（ダンスを含む）が６、ボランティア関連が６，その他学習や交流を目的とするサークルが２であり、年度末の登録全学生数は252名であった。これは全学生数の18％である。Ａ短期大学は地方都市部に位置し３キャンパスに跨っている。学生の在籍年数は学科により２年制または３年制であり、ひとつの学科に所属する学生で構成されているサークルは15、学生の所属が複数学科に渡るサークルは２である。短期間で資格取得や就職活動を目指す多忙な学生達で構成されていることから、可能な範囲で無理なく活動をしているサークルが大半である。

【新型コロナウイルス感染拡大予防策】

学生委員会会議を通して、２つの感染予防対策チェックリストを作成した（資料１、資料２）。１は主にスポーツ活動をする団体のための、スポーツ施設、屋外施設の利用を想定したもので、２は主に屋内で実施される文化活動、音楽活動、ボランティア活動を想定している。

１は、「施設設備の事前確認」「使用する用具」「実施中」「熱中症への配慮」「休憩中」「更衣室」「手洗い場」「実施後」「登校可能時」「終了後」の大項目と、それぞれの大項目をより具体的行動で表現した小項目からなり、小項目全てで17項目

資料１　サークル活動参加・実施に伴う、「新しい生活様式」に関するチェックリスト

Ⅰ．スポーツ施設（屋外、体育館等）や屋外施設（キャンプ場等）を使用する活動の場合

	内　容	項　　目	✓
1	施設設備の事前確認	手指消毒剤が設置されている	
2		施設内は最大限換気が実施されている （屋外施設の場合は、この限りではない）	
3		施設の消毒が実施されている	
4		使用する用具は可能な限り持参する。または、共用する場合、洗浄や消毒されていることを確認する	
5	使用する用具	使用する用具は可能な限り持参する。共用する場合、洗浄や消毒されていることを確認する。	
6	実施中	用具使用後は、可能な範囲で消毒して返却する	
7		スポーツ実施以外はマスクを着用して三密を避ける	
8		２ｍ以上距離をとる、大声で会話しない、他の人の呼気を吸わない方法等をルール化する等の工夫をする	
9	熱中症への配慮	実施中は、熱中症予防に留意する観点からマスクをはずしても差し支えない。水分摂取も積極的に実施する	
10	休憩中 更衣室 手洗い場	手洗いや手指消毒をこまめに実施する	
11		ドリンクの回し飲み等はしない	
12		タオルの共有はしない	
13		施設内での食事は極力控える	
14		施設利用については、管理者の指示に従う	
15	実施後	体液（血液、鼻水、唾液、汗拭きタオル以外で大量に汗が付着した衣類等）のゴミはビニール袋に密閉して持ち帰る。自分で扱うか、担当者がまとめる場合にはマスクや手袋を着用する	
16	登校可能時	本チェックリストを、参加学生リストとともに学生総合支援センターへ提出する。活動後１週間を経て提出不可の場合には顧問・学生総合支援センターへ連絡する	
17	終了後	２週間以内に、体調不良が発生した場合にはサークル顧問に報告し指示をうける	

サークル名	学　科	学年	氏　名

活動実施日　　年　　月　　日　　提出日　　年　　月　　日

である。

２は「施設設備の事前確認」「三密を避ける工夫」「飲食」「使用設備・備品等」「実施後」「登校可能時」「終了後」の大項目と、それぞれについての具体的行動 17 項目である。

これらを２部に分けたのは、特に、運動に伴ってウイルスが含まれる飛沫が多くなる呼気を互いに吸わないよう行動する予防方法の必要性が大きく異なるためである。学生は、サークルの活動内容により「屋外で実施」か「屋内で実施」のいずれかを選択し、活動前から施設設備の感染予防策が厳に図られているのか確認し、活動実施に際しては、三密回避や消毒、ルールの工夫を通じて具体的な感染予防対策行動を実施し、終了後には呼気や体液の付着が想定されるごみの取り扱いを適切に処理し、体調不良者が発生した場合には報告

資料２　サークル活動参加・実施に伴う、「新しい生活様式」に関するチェックリスト

Ⅱ．学内や屋内での活動を実施する場合（文化活動、音楽活動、ボランティア活動等）

	内　容	項　　目	✓
1	施設設備の事前確認	手指消毒剤が設置されている	
2		室内、更衣室等最大限換気が実施されている	
3		施設の消毒が実施されている	
4		楽器や用具は可能な限り持参する。共用する場合、洗浄や消毒されていることを確認する	
5	三密を避ける工夫	居室が換気されている　（窓を開放する、換気扇を回す等）	
6		座席は２メートル程度離れ、互い違いにするなど工夫している	
7		対面よりも横並び、屋内よりも屋外を活用するよう努める	
8		会話中はマスクを着用する	
9		身体接触を控える方法を選択する	
10		前後で遠隔システムを活用する等、接する時間が短くても効果ある方法を工夫する	
11	飲食	飲食はなるべく避ける。必要な場合、食品を共有せず小分けにする	
12		食事中の会話を控え目にし、短時間で済ませる等の工夫をする	
13		熱中症を避けるため、水分摂取を積極的に行う	
14	使用設備・備品等	使用品はなるべく個人のものを使う。 やむを得ず共有する場合には、使用前後で消毒を実施する	
15	実施後	体液（血液、鼻水、唾液、汗拭きタオル以外で大量に汗が付着した衣類等）のゴミはビニール袋に密閉して持ち帰る。自分で扱うか、担当者がまとめる場合にはマスクや手袋を着用する	
16	登校可能時	本チェックリストを、参加学生リストとともに学生総合支援センターへ提出する。 活動後１週間を経て提出不可の場合には顧問・学生総合支援センターへ連絡する	
17	終了後	２週間以内に、体調不良が発生した場合にはサークル顧問に報告し指示をうける	

サークル名	学　科	学年	氏　名

活動実施日　　年　　月　　日　　提出日　　年　　月　　日

をする必要があることになる。これらの感染対策の礎となる学生個人の体調管理を実施することや、健康チェック内容についてはすでに指導されている内容であることから削除した。

Ａ短期大学の新型コロナウイルス感染拡大予防対策においては、スポーツ関連、および室内での活動それぞれにつき 17 項目について確認できた場合にサークル活動を実施してよい、としている。

Ⅱ．目的

2020 年度に短期大学学生委員会で作成した課外活動における感染予防対策について、学生がどのように認識し、対応したか確認することを目的とした。

Ⅲ．調査方法

Google フォームを利用して、令和３年３月 15 日～ 18 日、学生総合支援センターから学生のメー

ルアドレス向けに発信した。登録されていたサークルに所属している学生251名のうち、メールで発信可能であった249名に、学生総合支援センターからGoogleフォームのリンクを発信し、回答を得た。また学生総合支援センターから、登録されているサークルに関する情報を得た。

倫理的配慮：これら学生への発信は学生総合支援センターから行い、Googleフォームによって結果を確認することから、調査の段階で回答者個人が特定されることはなく、アンケートの特性上回答者も特定されない。その旨をアンケートフォームに記載して回答によって同意を得られたものとして扱う説明を記載した。用語の定義：「感染予防策」新型コロナウイルス感染症に関わる感染予防策。「活動」：サークルとして学生が複数集まって行動を共にすること。「飛沫」：くしゃみ、せき、会話などによってヒトから空気中に放出される直径数ミクロン以上の液滴のこと。

Ⅳ．結果

令和２年度末までに登録されていたサークルは251名、18団体、活動総予算は1,729,000円で、２団体を除き主に学科毎の学生により構成されている。学生総合支援センターに学生が提出された報告によれば、活動した団体数は８、参加活動学生数は延べ355人であり、活動した８団体のうち、スポーツ関連サークル数は５団体、ボランティア活動サークルが１，その他交流等を目的とするサークルが１団体であり、ボランティア活動と交流を目的とするサークルは１回限りの活動となっている（**表１－１**）。

アンケート回答率は9.2％（23名/249名）であった。回答学生23名は全員が卒業年次学生であった。回答者の登録サークルの活動内容はスポーツに関するもの、音楽に関するものがともに30.4％で、ボランティア活動がそれに次ぐ。回答学生は23名全員が卒業年次の学生であった。

アンケートに対して、令和２年度の活動回数は、「活動しなかった」と答えた学生が52.2％で、過半数を占めている。年度末に次年度への継続申請をしなかった団体は７団体であり、踊りやアニメなど文化芸術活動サークル（４団体）に多く、ボランティア活動サークルも２団体あった。コロナ禍において活動できなかったこれらのサークルは、在籍年数が２～３学年の短期大学においては複数学年に渡る交流の経験知の蓄積が困難であり、継続され難かったと言える。

サークル活動を実施した回数について聞いたところ、「０回（52.2％）」である一方、「５回以上（30.4％）」いる。サークルによっては活動を休止団体がある一方で、コロナ禍において、活動が承認された８月以降年度末までの８か月間に比較的活発に活動できていた団体もあった。一方、活動しなかったと答えた人たちに回答を確認したとこ

表１－１）活動報告があったサークル団体の活動回数と参加学生数

各団体の活動内容	１回目	２回目	３回目	４回目	５回目	６回目	７回目	８回目
スポーツA	13	16						
スポーツB	11	21	12	25	28	11	39	
スポーツC	16	16	16					
スポーツD	14	10	6					
スポーツE	7	8						
音楽F	9	6	5	7	6	5	6	3
ボランティア	32							
その他	7							
計８団体						延べ人数		355

表１－２）回答者数と所属学科

所属学科	回答者数（%）
医療に関連する学科 （リハビリテーション学、看護学、栄養学）	12 名（52.1%）
非医療系学科 （観光ビジネス学、ビジネスキャリア学）	11 名（47.8%）
	計 23 名

ろ、「感染するのが不安だ（60.0%）」、「外出自粛を求められたから（53.3%）」、ほかに「登校機会の減少により打合せができなかった（46. ７%）」と回答があり、学生生活がコロナ禍により影響を受けていたと言える。「就職活動（46.7%）」や「学習時間確保のため（26.7%）」と答えた学生もいた。

感染予防策に関する学生の認識を聞いた。17項目のチェックリストによる感染対策を実施することについて、肯定的な反応としては、「感染予防策として何を実施すればよいか理解できた（87.0%）」、「学生が相互に留意・指摘しあうことができた（91.3%）」、「２回目以降は慣れてきた（80.6%）」、「チェックリストによりサークル活動が禁止されずに実施でき、学生同士の交流ができてよかった（91.3%）」、「顧問の先生が熱心に協力・指導してくれた（78.3%）」であった。波及効果としては、「日常生活の中でも感染予防のための具体的方法が理解できた（91.3%）」、「三密回避や身体接触を避けるための新たなルール作りを工夫・協力できた（87.5%）」であった。

一方、感染予防策に関する困難を感じた内容としては、「感染予防方法は理解できたが、参加学生の実施協力が難しい項目があった（73.9%）」、「感染予防の方法は理解できたが、日頃の食事管理、睡眠の確保等、体調管理は難しかった（65.2%）」、「マスクを着用し続けることが難しかった(47.8%)」、「常に２メートル以上の距離を保つのは難しかった（65.2%）」であった。

回答学生のうち 11 名（47.8%）が非医療系学科（**表１－２**））に所属している。チェックリスト利用について「複雑すぎるわけではない」と回答している学生が 73.9%である一方「このようなチェックリストがあると、発症者が出た場合に自分に責任が生じるかと不安になる（60.9%）」、「アルバイト先では実施できない予防策もあり不安になる（78.3%）」、「顧問の教員なしには実施できないため煩雑である（73.9%）」、「１度実施した活動について煩雑さのために活動をしなかった（26.1%）」であった。

Ⅴ．考察

公認サークル登録学生にアンケート調査依頼メールを発信した時期は年度末３月 15 日であり学位記授与式を終えて卒業していること、２年課程・３年課程が混在する短大であり、サークル活動の主を担っているのは卒業年次の学生も多くいることが低回答率に影響していると推測される。

活動を実施できた学生達は、教員の指導もあり日常生活の中での感染予防策も理解できたと答えている一方、煩雑さや、感染に対する不安も感じている。

コロナ禍による生活の変貌から、「抑うつ症状を訴える学生が 7.8%、抑うつ症状リスク低下と関連のあった因子には、運動、実家が県外、相談できる人の存在が指摘されている［１］。不織布のマスクによる飛沫飛散や吸い込み防止の効果については多数の報告がある［５］［６］一方、着用により顔面の下半分は隠れて表情が見えにくくなり、否定的な意図が増幅されて伝わり、肯定的な意図は伝わりにくいとの報告［８］がある。活動を「禁止されないで活動できたことは良かった」

との回答が91.3%、「顧問が指導・協力してくれた」と回答した学生も70%を超えている。この中には、「活動しなかった」と答えた学生も含まれていることから、活動継続の道を確保したことに対して、学生から一定の評価を得られており、抑うつ傾向を防ぐことに寄与できたかもしれない。

具体的な感染予防策については、具体的な提示により、感染予防対策に前向きに取り組もうとする（「日常生活の中でも具体的な感染予防対策が理解できた（91.3%）」）一方で、感染当事者が発症する2日前からウイルスを感染させるCOVID-19について、「日頃の体調管理が難しい（60.9%）」、「アルバイト先で実施できない予防策もある」と答えている。回答者は卒業年次の学生であることから、医療系学科であれば実習や国家試験、非医療系学科であれば授業のほかに就職活動に追われる中で多忙であり、体調管理の難しさとともに、学生個人だけでは対処しきれないアルバイト先での感染対策への不安も現れたものと考える。

「顧問の教員なしには実施できないため煩雑である（73.9%）」、「1度実施した活動について煩雑さのために活動をしなかった（26.1%）」であった。多忙さの中で、煩わしい感染対策を避けるために活動しないことは学生による選択であり、短大として禁止しているわけではないが、「教員がいなくては実施できない。」との回答も多い点は、教員への調査を実施する必要がある。学生は授業の遠隔化により、他学生や教員と何気ない会話を交わす機会が極端に減少した。学生の7.8%に鬱症状を認めたとの報告もある［1］。

マスクを着用することについてスポーツ庁のガイドラインでは、運動強度が高い場合、マスクを着用することにより十分な呼吸ができずに人体に悪影響を与える可能性があるため、屋外で人と2メートル以上の十分な距離を確保できる場合にはマスクをはずすよう呼びかけることが必要［1］としている。

「マスク着用が難しかった（47.0%）」と回答した学生のうちスポーツ関連活動サークル所属学生が30.4%、で、運動後に呼吸が乱れて苦しくなる等、呼気を発しやすいスポーツ関連サークル活動ばかりではないことから、さらなる調査も必要である。

学生の衛生行動に関する調査で新型インフルエンザパンデミック期における衛生行動では,「手洗い」「うがい」以外の実施率が20%前後と低く、これらは知識との関連で有意差があり、感染者群と非感染者群との間に有意な違いは認められておらず行動に影響したのは学生の感染に対する憎悪であった［7］との報告がある。今回の調査でも、食事や休息、栄養摂取等については難しかったと回答している学生が多い。食事や休息等の体調管理については、学生個人の認識や態度の変容が必要であり、「2メートル以上距離を保つ」、「新しいルールを協力して工夫する」等は学生一人では実施できず知識に基づいた合意やコミュニケーションが必要である。教員の指導や協力によって、「日常生活の中でも感染予防のための具体的方法が理解できた（91.3%）」（図9）、「三密回避や身体接触を避けるための新たなルール作りを工夫・協力できた（87.5%）（図10）」のであれば、今後も新たな変異株や感染症の出現があり得ることから、感染の蔓延状況を確認しながら感染予防策を具体的に提示した上で、学生が楽しみのために活動することも、指導が必要となる。α株の蔓延時期ではあったものの、2020年度におけるサークル活動による発症者は皆無であった。これには、教員の指導により厳に感染対策を実施できたこと、その後現れるo株と比較して実行再生産数が低いことも理由として説明できるかもしれない。

Ⅵ. 結論

本研究は、コロナ禍で制限されがちであった学生生活において、履修科目以外の学生生活の場を短期大学として提示して感染予防策を示し、学生の意思により活動した結果学生がどのように認識し、対応したか確認した。学生はチェックリストによる対策の提示については概ね肯定的に受け止めていた一方、実施にあたり困難も感じていた。流行規模を踏まえた対策がとられている状況下で

サークル活動に関連した発症者は皆無であった。感染と予防の知識とともに、食事、睡眠、日頃の感染対策も含めた継続的な指導や、学生を感染から守るアルバイト先等地域社会への発信も必要と言える。

Ⅶ. 研究の意義と課題

学生の課外活動について、短期大学として感染予防策を提示して活動を許可することにより、提言されていた学生生活への配慮」を実施できた。希望して活動した学生達がいた一方で、感染リスクを考慮して取りやめた学生もいた。顧問がいなければ実施できない、煩雑さから活動を実施しないなど、感染予防策は、学生にとっては簡単に実施できることであるわけではないことも明らかになった。今回は顧問の立ち合いを必須としていない。実施にあたっては一定の範囲で顧問立ち合いを条件にすることや、感染予防策を適切に実施できているか、を評価することも必要である。

参考文献

1. スポーツ庁：社会体育施設の再開に向けた感染拡大予防ガイドライン https://www.mext.go.jp/sports/content/20200514-spt_sseisaku01-000007106_1.pdf（2022年2日 2022年1月15日引用）
2. 文部科学省：大学等における新型コロナウイルス感染症対策の徹底と学生の学修機会の確保について https://www.mext.go.jp/content/20201223-mxt_kouhou01-000004520_03.pdf（2022年1月15日引用）
3. 新型コロナウイルス感染症対策専門家会議：新型コロナウイルス感染症対策の状況分析・提言（2020年5月4日） https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000629000.pdf（2022年1月15日引用）
4. 野村恭子，南園佐知子，前田恵理，キムロザリン，他.：COVID-19感染拡大に伴う自粛中の大学生における抑うつ症状，自殺関連念慮に関連する因子の検討．心身医学．2021；(suppl)：193-193.
5. Derek K Chu, Elie A Akl, Stephanie Duda, Karla Solo, Sally Yaacoub, Holger J Schünemann. Physical distancing, face masks, and eye protection to prevent person-to-person transmission of SARS-CoV-2 and COVID-19: a systematic review and meta-analysis. The lancet. 2020.（395）1973-1987.
6. 山川勝史：論説 満員電車におけるウイルス感染シミュレーション．国際交通安全学会誌．2021；(46)
7. 森口哲史，宮本香織，瀬戸川将，鶴田信元，他．鹿児島市の大学生における新型インフルエンザ罹患と衛生行動．鹿児島大学教育学部研究紀要．2018（62）31-41
8. Nour Mheidly, Mohamad Y. Fares, Hussein Zalzale, and Jawad Fares. Effect of Face Masks on Interpersonal Communication During the COVID-19 Pandemic. Front. Public Health. 2020（8）582191. doi: 10.3389/fpubh. 2020. 582191.